

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

居場所

楠元 洋海

入職後二十四年間の多くを作業科の担当者として過ごした私にとって、作業着はある意味での正装でもある。作業着に身を包んでい

ると不思議と穏やかな気持ちにもなれる。さらに言えば、新年度を迎える前に真新しい作業着を購入することは密かな楽しみでもある。

安価で丈夫な品揃えの某量販店に足を運べば、作業着のみならず用途ごとに陳列された数十種類の

手袋にも目がとまる。高額な商品もあるが、値段と使い心地が比例するとは限らない。自らの手にフ

ィットする相棒を探すかのようなひとときに小さな至福を感じる。

大げさかもしれないが、新年度を迎える準備が出来るという事は特別なことであるからだ。

佑啓会との出会いは「不採用」であった。そんな私がこの春にふる里学舎しぜん工房の施設長を仰せつかり、本紙「佑啓」の一面原稿を手掛けている。自分でも信じられない程の変化である為、自己紹介を兼ねて少しづつ説明をさせて頂く。

紙機関 佑啓 第125号

二十四年前、就職氷河期と呼ばれた時代。佑啓会が主催する見学説明会には、百名近くの学生が集

い、最終的には数名のみが採用される狭き門でもあった。当時を思い返せば、自分が集団に埋もれていく姿ばかりが蘇る。

採用試験は、筆記試験と面接の二部制。しかも、筆記試験後に約半数の受験者に不合格が告げられる。狭き門の前には、高くそびえる壁がある事を試験当日に知る事となる。

それでも面接まで漕ぎつける事が出来たが、面接室に入った瞬間からの記憶は曖昧である。そんな私に与えられた時間は数分間の簡単な質疑のみ。面接が終わった瞬間に不合格を確信したのを覚えている。

後日、自宅に届いた「不採用通知」を眺めながら、社会人としての居場所を得る事が出来なかった失意に暮れたが、諦めの悪い私はどうすれば働けるかのみに思考を集中させることにした。

「負けを認めなければ、一度も負けていない」

我ながら前向きな性格である。



私の思考形成に影響を与えてきたであろう家族について紹介をしたい。

鹿児島県薩摩川内市（原子力発電所がある田舎町）に両親の実家があり、男ばかり三兄弟の長男として千葉県で育った。父は、他県の方がイメージする薩摩隼人そのものであり、母は好奇心と社交性の塊だと言えよう。

はじめて親父の鉄拳を頂戴したのは、中学二年生の秋であった。部活をサボり、楽しく帰宅したのも束の間、顧問からの電話に父が出てしまった運の無さを恨んだ。携帯電話が存在しない時代において、自宅の電話を誰がとるかによって、その後の結末が変わる事があった。

芋焼酎を片手に「十四歳という年齢は、戦国時代ならば元服だ。これからお前を大人として扱う」という当時は理解に苦しんだ一言もこの時に貰った。以来、目上の方に対する言葉の選び方から瓶ビール

の注ぎ方に至るまで、細部に渡り父が大切にしてくれた価値観を叩きこまれてきた。

鹿児島県の田舎町から単身千葉県に出てきた父は、成田闘争、暴走族全盛期を警察官として過ごしてきた。バカ息子の将来を案じ、懸命に人としての価値観を伝えてくれていたと思うが、受け手側の問題により、度々親父の逆鱗に触れていく。この頃に「諦めない精神」が培われたと自己分析をする。

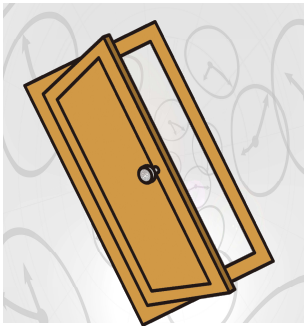
あまりにも目に余ると警察署内の柔剣道場へと強制連行され、天地の区別がつかなくなる程に投げ飛ばされる事もあった。

「自分勝手に生きてはならない、全ての行いは自分自身にかえって

くるのだから」と父の座右の銘でもある「情けは人の為ならず」について、繰り返し考える機会をもらった。

母に対しても感謝の言葉しかない。紙面の関係上、詳しくは語らないが、父との調整役であった事は間違いない。少々、こじつけが強いが福祉の仕事に当てはめるとすれば、相談支援専門員のよう

な存在であり、私が幹旋・調整機能について最初に学んだ先生は母であったかもしれない。



目を閉じて、深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出す間にふと過去の一情景を鮮やかに思い浮かべることがある。

応接室のソファァー・出窓の花瓶に飾られた白い花・扉が開き目の前のソファァーへと腰を落ち着かせる里見理事長の姿。

再びの採用面接の瞬間である。種明かしをすると、施設実習中に職員の方から口添えを頂き、市原市役所の方に引き合わせて頂く機会を得ていた。偶然とは重なるもので、この方は私の友人が少年野球をしていた頃のコーチでもあった。

友人の助けも借り、崖っぷちで踏みとどまる事ができた私に一筋の光明が差す。

「一年間、契約職員として頑張れますか。一年後も今の気持ちで頑張れていれば、正職員として改めてこちらからお願いをします。貴

方をここまで導いてくれた人達への感謝の気持ちを忘れてはいけませんよ」

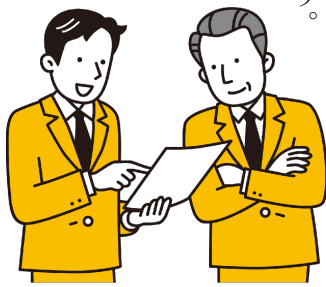
里見理事長からの温かくも力強い言葉を頂きやつとの思いで佑啓会の一員となれた。傍から見れば、市役所のコネでねじ込んでもらっただけの新人職員。人に自慢できるような特技も能力も無かったが、ここで働かせてもらえる感謝の気持ちにおいては誰にも負けない自信があった。

あれから四半世紀。勿論、順風満帆であったわけではない。自分の力では挽回不可能となった失敗は一度や二度の話ではない。その度に多くの仲間に助けられてきた。「一生懸命にやった結果だし、後は皆で考えていこうよ」

上司や先輩達からの言葉に何度救われたことか。

一方で、誤魔化そうとした場合には、強制的に自分と向き合う機会を与えられた。不思議なもので、褒められた記憶よりも後者の記憶の方が自分にとっては大切な思い出となっている。

失礼ながら当時は、面倒な先輩達だと感じる事もあったが、本心では兄のような存在だと慕っている。濃厚な人間関係にこそ佑啓会で働いていく上での醍醐味が隠されていると感じる。経験を重ねた今、私自身が後輩達から面倒な奴だと思われるような存在でありたいと願う。



近年では、担当する業務の幅も更に広がり「障害福祉の魅力」を如何にして学生に伝えていくかを念頭に施設実習の受入業務を担当するようになった。福祉業界のみならず人材難が騒がれるようになった昨今、二十四年前のあの日のように百名近くの人込みに埋もれまいと必死であった時代からは想像が難しい事態となった。学生側から見れば、好条件の求人や選択できる企業が増えたように見え、利点ばかりが注目をされるが、実はそうではないと感じている。

企業風土、仕事内容などへの理解が浅いまま将来の進路を決めてしまう人。また、世の中には、人手不足の解消を優先し、学生に対して、綺麗な部分だけを伝え、実際には説明した業務内容とかけ離れた部署に配属する企業もあると聞く。

勿論、佑啓会においてはそのような事はない。

「利用者さんを親御さんから預かっていうという気持ちがあるのは当たり前ですが、職員一人ひとりが私にとっては子供のよう

な存在。それぞれの親御さんからお預かりしている訳ですから社会人として育てていく事が私の使命だと思っている」

ある日の宴席で里見理事長から伺った一言である。私こそ佑啓会を通して、多くの方に育ててもらったから今がある。「不採用」で終わるはずの私に居場所を与えてくれ、導いて下さった皆様に対して、これからも感謝の気持ちを持ち続けたい。

（ふる里学舎しぜん工房 施設長）

得られた三十年

並木 傑

時計を見ると既に三十分が経過していた。通常のパーティーでそのような挨拶を聞く機会はなかなか無いだろう。ましてや祝辞や乾杯ではなく中締めめの挨拶というのだからやはり佑啓会のイベントは型破りなことが起こるなど実感をした。

二〇二三年四月でふる里学舎の開所から三十周年を迎えるということで、一年以上前に有志の職員で最初の三十周年プロジェクトチームの打ち合わせが行われた。議事録を振り返ると、納涼祭にゆずを呼ぶ等のおめでたい意見も多数挙げられていた。結果、記念ロゴマークの作成や記念職員旅行等、プロジェクトチームの発案で実現しているものも数多くあったが、その中でもメインに進めてきたのが五月十二日に実施された三十周年記念パーティーである。

新型コロナウイルスの感染状況が落ち着かない状況が続いていたが、明るい兆しが見えたのが二〇二三年の年明け。春頃には感染症法上の扱いが五類に引き下げられる方針というニュースが流れ始めた頃にはチームを増員した実行委員会を組織し、本格的な準備が始まった。

前号で在原次長が触れられた環境整備の打ち上げや新人歓迎会等、職員の宴席は全てパーティーのシミュレーションとして実施された。

外部の方は驚くかもしれないが、乾杯のビールを出すタイミングやコップには紙ナプキンを巻く等、里見理事長が自ら陣頭指揮を執り、細かい指示を出す。極めつけは、当日もステージに上がったふる里学舎千倉の児童のダンスの際に照らす照明まで熱血指導をしていた。

パーティー前日に会場である杜のホール（ふる里学舎本部の敷地内にある体育館）で準備をしていると今までに見たこともない程の沢山のお花が次々と運ばれてきた。ステージに金屏風を設置すると、普段はバレエボールコートが似合う杜のホールがすっかりパーティー会場に様変わり。

り。夜まで舞台や接待のリハーサルを繰り返し行った。久しぶりに外部の方を招く大きなイベントのため緊張感がありつつも懐かしい感覚に嬉しくもあった。



30周年記念式典会場内

当日は、朝から晴天！とはいかなかったが、雨予報の中、何とか曇り空で持ち堪えていた。参加する職員での全体の打ち合わせを行った後、各担当で来客者の受け入れ準備を進めた。琴と尺八の生演奏が流れる中、開式の時間が近づくにつれて、続々と会場は人で埋め尽くされていった。来客者は三百数十名、他法人の施設長や様々な団体の代表の方等、錚々たるメンバーである。幸運なことに雨に備えて用意をしていた一〇〇本以上の傘の出番はなかった。

里見理事長の挨拶でパーティーはスタートし、いつも大変お世話になっている来賓の皆様からご挨拶をいただいた。佑啓会自慢の厨房職員の手作りの料理にはきつと皆様満足を頂けたと思う。ふる里学舎千倉の児童のダンスを初めて見た人は、レベルの高さに驚いていた。心配された照明もまずまずの評判であった。

そして冒頭の社会福祉法人菜の花会の小林勉理事長からの中締めめの挨拶。なんとパワーポイントまで用意されていた。当日までに関係者から聞き取りをしたようで、里見理事長の出生時から、一緒に働いていた前の職場の話、佑啓会の次世代を担う里見常務の紹介まで行っていたのだ。軽快なテンポで楽しいエピソードの連発だったので会場は笑いに包まれたが、最終的には三十三分の超

大作となった。里見理事長と小林理事長の絆に感動をしたが、このような演出があることは誰も聞いておらず、まさにサプライズであった。



里見理事長挨拶

大きなイベントを終えると必ず打ち上げを行うのが佑啓会のスタイルだ。その日も皆様をお見送り後、片付けもほどほどに本日二度目の乾杯で打ち上げが開催された。空腹と口渇と緊張から解放され、わけもわからず途中、何度かみんなで万歳をしていた。里見理事長の抱えていたプレッシャーは別格だったようで、安堵の表情を浮かべられていた。

今回のイベントは普段お世話になっている皆様に対する感謝を伝える場であると共に、佑啓会の職員にとっても、新型コロナウイルスとの戦いが終わり、いつもの佑啓会に戻る狼煙となる機会になった。夏の納涼祭、秋の旅行と忙しい日々を過ごせるのは、マスクをしながら消毒をするより幸せなことであり、この仕事の醍醐味である。今後も利用者も楽しく、家族も楽しく、職員も楽しくの精神で同じ仲間と四十周年、五十周年と迎えられたら嬉しく思う。

尚、当日の様子は佑啓会のYouTubeでも紹介されているので、是非見て頂きたい。



30周年記念
ロゴマーク

（ふる里学舎蔵波 係長）

新米委員長の夏

角田 宗彦

「夏」と聞いて大抵の人は何をイメージするだろうか。海、スイカ、花火、高校野球など、夏の風物詩と言われるものは数あれど、ふる里学舎の夏と言ったら忘れてもらっちゃ困る夏のイベントがある。そう、『納涼祭』である。常日頃からお世話になっている地域の方々への感謝の気持ちを込めて開催しているのだが、その規模が凄い。

年々来場者は増え続け、近年は二千人を超える方々にご来場頂くようになった。そんな納涼祭もここ数年は例外なく、コロナの煽りを受けて開催を見合わせていたが、ついに今年四年ぶりに開催の運びとなった。

話は逸れるが、私は入職して十一年目。私にとって納涼祭と言えば、毎年駐車場係。正直、メイン会場やしげん工房でどんな催し物が繰り広げられているのか等知る由もなく、歓声や拍手を遠く耳にするだけで、暑さに耐えながらひたすら来場者や帰路に就く車を捌いていくのに必死な一日でしかなかった。そんな私が今年、納涼祭の中心を担う静風荘に異動した事で四年ぶりに行われる納涼祭の実行委員長という重役を務める事が決まった。担当幹部であり、ふる里学舎きつてのお祭り男である飯田部長の「待っていました！納涼祭！」と言わんばかりの表情を見てみると「自分には荷が重すぎます」なんて言えるはずもなく、「やっちゃいましょ！」と調子の良い事を言っている自分がいた。そして、ただがむしやらに準備に勤しむ、新米実行委員長の日々がスタートしたのである。

事前準備は多岐にわたる。出演団体の交渉や模擬店の打ち合わせ、地域住民の方々への挨拶周り等、やる事が盛りだくさんだ。なかでもメインとなる歌手の選定には苦労した。交渉する歌手にはことごとく断られる始末。それでも納涼祭は待ってく

れない。刻一刻と近づいてくる本番の足音を感じながら粘り強く交渉した結果、加藤登紀子さんに出演を快諾して頂ける事になった。まさに一発逆転満塁ホームランだ。これで納涼祭の成功は間違いないと思った矢先、例年出演して頂いている団体のキャンセルが入ってしまった。こうなればもう開き直るしかない、と、出演してくれそうな団体へ手あたり次第連絡をとったところ、船橋を拠点に活動するREDA舞神楽というよさこいチームに出演して頂ける事になった。後々分かった事だが、なんと昨年によさこい日本一のチームであった。そんな幸運にも恵まれて何とか当日を迎える事となった。



絶好の納涼祭日和！メイン会場

心配された台風の接近も何の事やら、朝から強い日差しが照りつける絶好の納涼祭日和。納涼祭はボランティアさんや家族会を含めると受け入れる側だけで総勢二五〇名程になる。実行委員長としてその中心にならなければならぬが、今までそんな経験もなく、うろろろするばかり。それでも各セクションの責任者を中心に、納涼祭を初めて経験する新人職員までもが皆自分の役割を理解し、的確な行動を取ってくれていた。

法人内バンドのファンファーレを皮切りに、REDA舞神楽の会場を巻き込むパフォーマンス、千倉児童によるエネルギーッシュなダンス、そして加藤登紀子さんの心揺さぶられるステージに会場は大盛り上がり。

最後は恒例となっている大塚囃子と餅投げで無事にフィナーレを迎える事ができた。



大塚囃子による演奏

全てのお客様をお見送りした後はお待ちかねの打ち上げである。里見理事長を始め、皆さんから労いの言葉を頂いた時、何とも言えない達成感を得たことは言うまでもない。普段はそれぞれ全く違った環境の中で仕事をしているが、ひとたび声がかかる」と法人全体が一つの目標に向かって結束する。そんなふる里学舎の魅力が改めて感じた、暑い夏の一日であった。

「皆さん、来年も宜しくお願いします！」

（ふる里学舎静風荘 主任）

〇●〇●〇●〇●〇●〇●〇●〇

編集後記

夏と言えば高校野球！吹奏楽の応援が可能となり、活気が戻った甲子園。最後まで全力で楽しんでプレーする球児たちの姿に胸が熱くなりました。

今年の夏は猛暑が続く暑い夏でしたが、全国各地でイベントが再開され、久しぶりに沢山の思い出が出来た夏でもあったのではないのでしょうか。夏が終わっても佑啓会はまだまだ行事が目白押しです。これからも利用者さんと一緒に全力で楽しみたいこうと思います！

そんな想いを乗せながら佑啓一二五号をお届けします。

（主任 藤本 宏恵）